



滝沢昌之(フルート)

10歳よりフルートを学ぶ。大阪で若林正史、札幌で松原悠久両氏に師事。東京都立駒高高等学校卒業。国立音楽大学器楽科フルート専攻卒業。石原利矩氏に師事。大学卒業後、デンマーク王立音楽院教授、T.L.クリスチャンセン氏に師事するため、コペンハーゲンへ留学。デンマーク王立音楽院ではイスラエルの打楽器奏者、オロン・シュヴァルツのリサイタルで共演。東京コンセルヴァトワール尚美ディプロマ取得。野口龍氏に師事。金昌国、P.L.グラーフ、T.ワイ、P.マイゼン、瀬尾和紀、大村友樹各氏にレッスンを受ける。第5回日本クラシック音楽コンクール全国大会優秀賞。'06年より福岡を中心に、ソロ、室内楽の演奏活動、後進の指導を行う。トリオ・ディゾンネのフルーティスト。'07年より筑紫野カメロンコンサート音楽ディレクター。'09年あいれふにてリサイタル開催。アコルデ音楽企画代表。

阿部真弓(ピアノ)

福岡県立筑紫丘高校、桐朋学園大学音楽学部演奏学科ピアノ専攻卒業。ピアノを淀川郁子、末永博子、富本陶、三浦みどり、安井耕一、室内楽を森正、岩崎淑、末吉保雄等の各氏に師事。'90年夏ミュンヘン国立音楽大学にて、ミハエル・シェーファー氏に師事。同年冬、沖繩ムーンビーチミュージックキャンプ参加。大学4年在学中より、N響首席フルート奏者、小出信也氏のリサイタルでの伴奏を務め、卒業後も全国各地の演奏会で共演。'89年より、ゲヴァントハウス管弦楽団主席チェロ奏者、ユルンヤー・コブ・ティム氏と、福岡ほかで幾度か共演。その他数々の著名な演奏家と、室内楽やリサイタルの伴奏で共演する。'90年第43回日演連推薦新人演奏会にて九州交響楽団と、'92年には六本松室内管弦楽団と、モーツァルトの協奏曲を共演。'94年日露交歓コンサートに出演。'99年北九州芸術祭にて、伴奏者賞を受賞。現在は独奏、室内楽の両面で演奏活動を続けながら、中村学園大学、中村学園大学短期大学部の非常勤として、指導にあたっている。

埜口浩之(ファゴット)

東京芸術大学卒業。在学中アスペン音楽祭(米国)参加。第51回日本音楽コンクール入選。東京交響楽団を経て、'89年九州交響楽団に入団。アフィニス海外研修員としてフィラデルフィアにて研修。ファゴットを西村孝志、中川良平、B.ガーフィールド(フィラデルフィア管弦楽団)の各氏に師事。オーケストラ活動の傍らソロ活動、室内楽、ジャズ分野でも、"人の心に響く音"をテーマに活躍中。九州交響楽団ファゴット奏者。

<http://www.cremona-gakki.com>

The Muramatsu Flute
ムラマツ
MURAMATSU FLUTES フェア
フルート製作バイオニアムラマツフルート創始者
村松 孝一
1898-1960
没後50年
メモリアル・イヤー2010
「ムラマツ」のメモリアルの年に
あなたのフルートも「メモリアル」!!
〜メモリアル・エンブレムプレゼント中〜
(ムラマツフルート技術者による)
無料(クリニック) 予約制
タンポ・コルク・パネ等の部分交換
パランス調整
・お一人様一本で当日本人持参
・メーカーは問いません。

2010年11月13日(土)・14日(日)
特別ゲスト
吉岡 アカリ氏による
ムラマツフルート道定会
スペシャル・レッスン
予約受付中!

Flute アカリ氏
(東京フィルハーモニー交響楽団)

V.Q.パウエル VERNE Q. POWELL FLUTES USA
VERNE Q. POWELL FLUTES フェア
1927年ボストン
Verne Q. パウエル・フルートの神話が始まる
伝統のティースプーンフルートから1世紀
Innovation(革新)はパウエル社の伝統
パウエルフルート&ピッコロ
大商談会
グレードアップ・チャンス!
高価下取り実施
(パウエルフルート技術者による)
無料(クリニック) 予約制
タンポ・コルク・パネ等の部分交換
パランス調整
・お一人様一本で当日本人持参
・メーカーは問いません。

2010年12月11日(土)・12日(日)



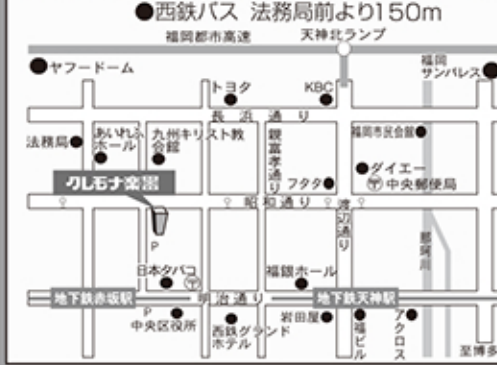
音楽といつも素敵な関係でいたい

クレモナ楽器

〒810-0041 福岡市中央区大名2丁目10-24
営業時間/10:00〜19:00(日・祭日10:00〜18:00)
定休日/水曜日 FAX 092-761-8382

☎092-713-5303(代)
e-mail cremona@mx21.tiki.ne.jp

アクセス ●地下鉄 赤坂駅3番出口より150m
●西鉄バス 法務局前より150m
福岡市東区 天神北ランプ



Zärtliche Liebe

～ 優しき愛に満ちた音楽 ～

あなたが私を愛してくれるように、私も、夜となく朝となく、あなたを愛している。
あなたと私が憂いを分かち合わなかった日は、1日とてなかった。(K.F.Herossee)

これは「Ich liebe dich」の名で知られるベートーヴェンの歌曲の訳詞の一部だ。26歳位の時に作曲されたとみられる。「愛する心」同様、ルードヴィヒにとって、「応えてくれる愛」こそが重要であり、決定的な大きな力となった。それは愛を求めた者の心を変容させ、魂に活力を与えるものであった。ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン彼は生涯、母性愛も異性愛も含んだ幅広い「愛」を求め、また優しい愛に満ちた人間であった。

青年期、ハイドンやモーツァルトの古典派とは明らかに違う音楽へ、変貌を遂げるルードヴィヒ。ロマン派への歩みを踏み出すべく、少なくとも3つの要因が考えられる。

1つは彼の幼少の傷。2つは20代半ばより現れた難聴への苦悩。そして3つは前述の様に、「応える愛」に恵まれた恋愛がもたらした幸福と希望である。

アルコール依存症者の父親の不適切な養育は、児童虐待ともいうべきものだった。やがて現れる原因不明の断続的な耳鳴り。ルードヴィヒは元来とても社交的だったが、聴覚の衰えが顕著になると、会話もままならないために得意な社交を嫌う様になる。彼の音楽は次第に自己の内面への旅となり、その深みはむしろ宇宙的高みへ向かう。この聴覚を削られるという宿命は、やがて「運命の4つの音」として彼に闘いを挑む。ピアノソナタの「悲愴」や「ワルトシュタイン」をはじめ、あらゆる作品の中で、「4つの音」の先駆形は執拗に現れる。幼児期の「殴られた体験」は正体の知り得ない過去の外傷体験であり、難聴は心理的危機として「不気味なもの」であった。ルードヴィヒは自分のこれらの心理的課題と対決するために音楽を創造し、また、自らを滅亡から救っていく。やがて第5交響曲に運命動機として正面からの徹底的な闘いを強いられ、「熱情ソナタ」「第4ピアノ協奏曲」を中心とする「傑作の森(ロマン・ロランによる表現)」の作品群の中で闘いに決着をつける。傷は癒され、もはや葛藤と闘う必要がないほどの自由を獲得した彼の魂は、「田園交響曲」「皇帝協奏曲」に、精神活動の成果として現れる。

その境地に進んだからこそ、その後には第7交響曲の様な生命力に溢れた作品や、晩年の第9交響曲の様な、人類の普遍的な財産ともいうべき大傑作を生み出すことができたのだ。また、彼の幼児期のトラウマや聴覚をはじめとするあらゆるコンプレックスは、異性との関わりにも反映してくる。ルードヴィヒは恋多き人生を生きた。異性の多くは貴族の令嬢であり、伯爵夫人である。彼はいつも熱心に求愛し、愛されることを望んだ。それが創作の原動力であった。身分の違う者や親子ほど歳の離れた者、人妻や未亡人を愛することは、彼の偏りであった。ルードヴィヒの母は彼を愛していた。しかし父の虐待から完全には守れなかったのではないだろうか。様々な要因は彼の心の混沌(カオス)となり、結婚を望みながら現実的でない女性を愛してしまう。ルードヴィヒは生涯独身。彼の美しきエロース(原愛)は、心底「応える愛」を求めていたにも拘らず。

Ludwig van Beethoven

人生というものは、苦悩の中においてこそ最も偉大で
実り多く、かつまた最も幸福でもある。
—— ロマン・ロラン ——

善くかつ高貴に行する人間は、
ただその事実だけでも不幸を耐えうるものだ、
ということを私は証拠立てたいと願う。
—— L.V.ベートーヴェン ——

第2回 滝沢昌之 フルトリサイタル

若き ベートーヴェンの 輝き

滝沢昌之(フルート) 阿部真弓(ピアノ) 埜口浩之(ファゴット)

＜福岡市民芸術祭参加＞
2010/10/24(日)
19:00開演(18:30開場)
〔西南コミュニティセンター〕

協賛/クレモナ楽器 後援/ムジカテラシマ、インターナショナル・フリードリヒ・クーラウ協会、福岡市、福岡市教育委員会、
(財)福岡市文化芸術振興財団 協力/西南学院大学国際文化学部

これらの心の要因は、ナポレオンによって激動する世相の中で、天才ベートーヴェンを史上稀な芸術の高みへと形成してゆく。とりわけ交響曲、ピアノソナタ、弦楽四重奏の分野に命を宿し、「英雄交響曲」「月光ソナタ」「ラズモフスキー」に見られる自我の音楽の確立は、単なる個人的な感情を超越し、普遍的な人間心理の深みに通じ、その音楽は人の「心」から出、人の「心」に至るものとなった。尋常でないことを成し遂げる人は、尋常では克服できない苦悩を神から与えられるのかもしれない。

私事になるが、20代、ウィーンのカーレンベルクからハイリゲンシュタットまで森とブドウ畑を歩き、道に迷ったことがある。その時はまさか、同じこの小径を歩い

たベートーヴェンのリサイタルを自分が30代最後の年に行うとは思ひもしない。彼の言葉を少しでも理解し、真意に少しでも近づきたい。本日演奏する作品は、健やかで生気に溢れた音楽だ。そしてやがて訪れる英雄的な思想と爆発する自我も宿している。若きベートーヴェンの作品には、天才で巨人の光が未来に希望を与え、飽食に生きる現代人を鼓舞する輝きを持つ。1770年生まれ、ルードヴィヒ、1970年生まれの自分。200年余りの時間が今日、はく様の未熟な音楽家に巨人ルードヴィヒを会わせてくれる。その幸福は、今ここにいる皆さんも同じことと祈る。楽しみだ。

(文責:滝沢昌之)

フルートとピアノのためのソナタ 変ロ長調 WoO Anh.4(偽作)

Allegro-Polonoise-Largo-Thema mit Variationen

4つの楽章からなるソナタ。遺稿の中に楽譜が発見されたが、別人の写譜らしく、ベートーヴェンが作曲したという確かな証拠はない。もしも真作ならばボン時代の10代の頃と見られる。しかしその生気溢れる音楽や英雄的なモチーフはまるでベートーヴェンであり、フルートの古典レパートリーとして学ぶべき魅力的な作品である。

フルートとピアノとファゴットのためのトリオ ト長調 WoO37(1783年 ボン時代)

Allegro-Adagio-Thema andante con Variazioni

3つの楽章からなるトリオソナタ。この時期、ベートーヴェンはファゴットとフルートを組み合わせた曲を数曲書いている。フルートの独奏作品が少ないベートーヴェンに、この様な素敵な曲があることに、例え様のない幸せを感じる。

—— 休憩(15分) ——

フルートとピアノのためのセレナーデ ニ長調 Op.41(1796年 ウィーン時代)

Entrata(入場) Allegro-Tempo ordinario d'un Menuetto-Allegro molto
-Andante con Variazioni-Allegro scherzando e vivace-Adagio
-Allegro vivace e disinvolto

7つの楽章からなるセレナーデ。ウィーンの社交界では注目の音楽家として、若い闊達なエネルギーに満ちていた。20代半ば、彼の生気が発揮された作品。もとはフルートとヴァイオリンとヴィオラの編成で書かれ、その後フルートとピアノのデュオとして出版された。ベートーヴェン独特の語法が、演奏していても聴いていても楽しさに溢れ、幸せを感じる。